

設楽町大崎遺跡における中世の水田

～三河山間部地域の開発～

● 永井 邦仁

設楽町大崎遺跡は、設楽ダム関連の発掘調査によって中世の小規模水田遺構 410 基が確認された。水田遺構は地形や用水路によって大きく 4 群に区分でき、これに遺物の出土分布状況を重ねることによって、各群の形成に時期差のあることが明らかになった。以上の検討から、大崎遺跡では平安時代後期から戦国時代にかけて徐々に耕作地開発が進められたと考えられ、中世における山間部開発の具体的な一例として注目される。

1. 大崎遺跡について

北設楽郡設楽町に所在する大崎遺跡は、令和 3・4 年度に愛知県埋蔵文化財センターの発掘調査が行われた。調査では、縄文時代中期から弥生時代中期に属する 30 基の竪穴建物跡などで構成される集落遺構と遺物（縄文土器・石器など）が確認された。そして、その上層で水田（畦畔）や用水路（溝）の遺構が多数検出され、調査区ほぼ全域（約 11,085 m²）が中世（平安時代後期～戦国時代）に耕作地として利用されていたことが確認された（川添 2022・鈴木・川添ほか 2025）。設楽地域を含む三河山間部地域（豊田市東部・岡崎市東部・新城市・北設楽郡）で、このような過去の耕作地が遺構として確認できたのは初めてのことである。筆者は、奈良時代後半～平安時代前期（8 世紀後葉～9

世紀）を基点に急拡大する古代・中世の三河山間部地域における開発について関心を持っているが（永井 2005・2013・2017）、この遺跡における調査成果は、特に中世の具体的な開発過程を示していると着想した。本稿ではその形成の背景について考察してみたい。

大崎遺跡は境川左岸の狭小な台地上にあり、標高 365～378m の緩斜面である（図 1）。その端は高低差約 5m の崖となって境川に落ち込んでおり、河水面に近い遺跡立地である。境川は北東（八橋地区・川向地区）から豊川（寒狭川）との合流点（松戸橋）に向かって南西方向に流下しているが、大崎遺跡北側で大きく迂回した後は南北方向の直線的な河道となって遺跡西側を通過する。遺跡付近の河道両脇は切り立った崖が多く、大崎遺跡の北約 250m に川向東貝津遺跡の所在する狭小な段丘（平坦面）があるものの、河岸まで張り出した尾根筋によって互い

51

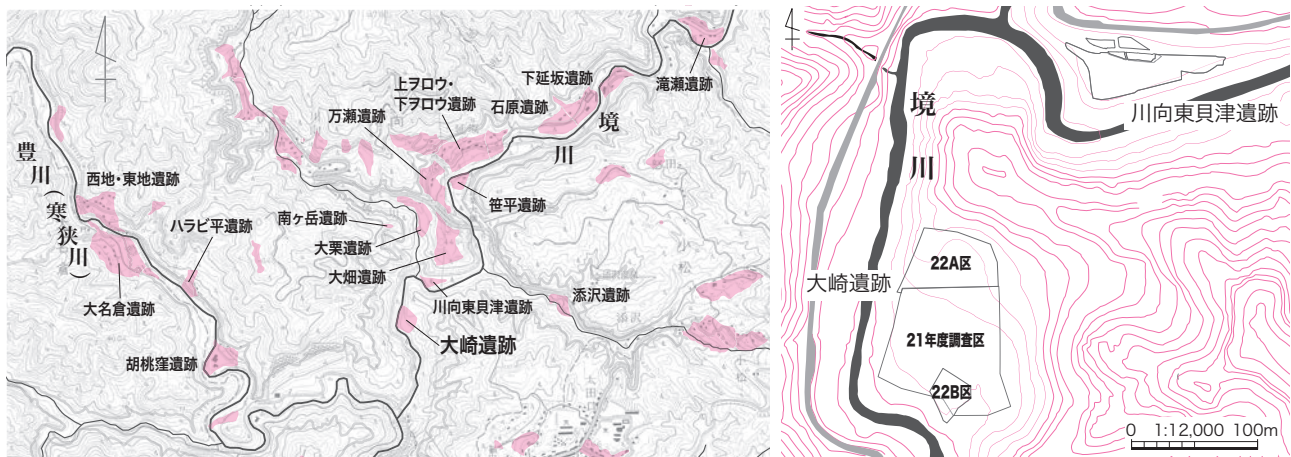


図 1 大崎遺跡周辺の主要遺跡（左）と大崎遺跡の地形および調査区配置（右）

に視界は遮られている。そして尾根筋を南東方向に上った標高 480 ～ 490m の一帯が設楽町の中心地（田口）で、現在（2025 年）もそこから尾根筋に道が延びている。一方、その尾根筋から約 300m 南の地点でも尾根筋が張り出しており、そこから下流の兩岸は岩崖が連続する。したがって崖に囲まれた袋状地形にある大崎遺跡は、他の遺跡や平坦面とは連続しておらず、そこへたどりつくルートは河川（境川）または先述の田口からの道のみということになる。

2. 地誌・地籍図にみる江戸時代の「大崎」

大崎遺跡の所在する北設楽郡設楽町田口字大崎は、明治 11(1878) 年の田口村合併以前は中嶋村に属していた（村落誌編さん委員会 2001）。中嶋村については、安永 9(1780) 年の設楽郡中嶋村が作成した『村差出シ明細帳』（設楽町史編さん委員会 1998）に耕作地などの村勢が記されている。それによれば、村の中心地は現在の設楽町立田口中学校付近で、周辺に耕作地を有していたとみられる。その位置関係は、幕末～明治初年に作成された「東路・西路・中嶋・田口町村

絵図」（設楽町誌編さん委員会 1999b）に概略で示されているが、大崎遺跡と思しき位置に耕作地の描出はない。これに関して、大崎が田口 10 か村の入会地でありそれらの火葬地とされていたという記述がある（設楽町誌編さん委員会 1999a）。

明治 17 (1884) 年頃の土地利用と境界を示した地籍字分全図（いわゆる地籍図、愛知県公文書館所蔵）では、田口村に隣接する小松村の同図に字「大崎」の表示があり、周辺に田口村の飛び地が所在した（図 2）。「大崎」の地目は「柴草山」と記されており、耕作地の表記はない。道は田口村から境川までの「境川道 長三百六間三尺」が表示されているが、川岸に達するも対岸（川向村）への渡河施設（橋など）は表示されていない。ちなみに江戸時代の境川渡河点については、川向地区の笹平～下ヲロウ間（美濃道、延坂）と八橋地区の滝瀬（伊那街道）が挙げられる（永井 2021）。

以上の地誌情報に加えて、大崎遺跡では最大径約 11m の集石遺構 10010SS・10011SS がある。礫主体の塚であり、その構築土中からは灰釉陶器～古瀬戸期の陶器類が出土する。また水田遺

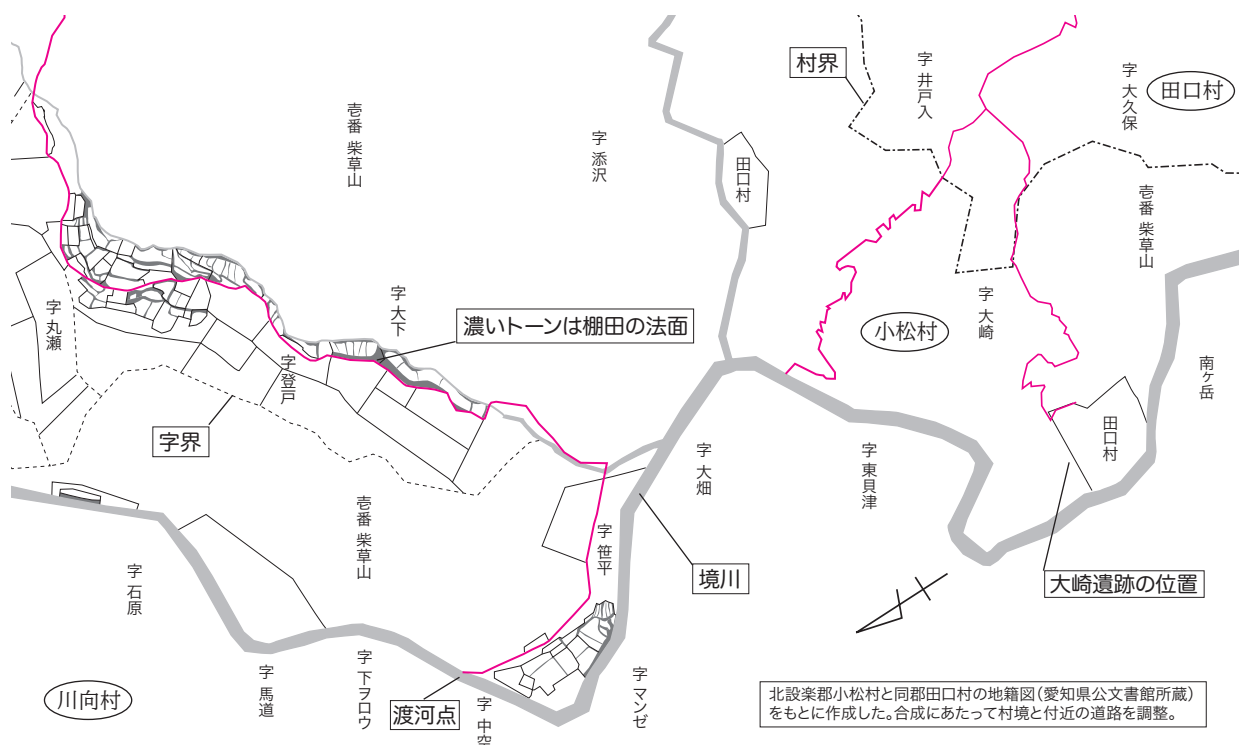


図 2 北設楽郡田口村と小松村の地籍図にみる大崎遺跡周辺の土地利用状況

構の土層より上位にあることからその廃絶後に存在したことは確実で、塚状の形から葬送や境界に関わる祭祀的な場所であったことを示す。なお発掘調査では、調査区南東隅（2218 グリッド）において中世水田遺構の上層でも水田遺構が検出されており、一部では江戸時代も耕作地として利用されていた可能性はあるが、面的な広がりはなく、土層断面でもほとんど確認されていない。大崎遺跡出土の江戸時代から近代の遺物は、灰釉丸碗1点・徳利1点ときわめて少なく、しかも飲食具であることから葬儀用だった可能性もある。よって遅くとも江戸時代末期以降の当地は、火葬地や柴草採取地として利用され、耕作地（水田）としてはそれ以前に放棄されていたと考えられる。

3. 水田遺構の土層

水田は、栽培用の湛水を目的とする畦畔に囲まれた皿状の区画が、水平ないしは階段状に連続する状態のことをいう。その遺構として、①遺構平面における畦畔の検出、②土層断面における畦畔状高まりの検出が必要である。

大崎遺跡では①に関して、調査着手段階（21A区）から基本土層Ⅲ層（にぶい黄褐色粘土・シルト層）上面で畦畔状遺構が検出され、それを覆う同Ⅱ層中より古代～近世の陶器類が出土した。ただしⅡ層は全体に攪拌を受けた状態にあり、水田耕作がその堆積過程で行われたことによってⅢ層上面の畦畔状遺構を形成したことも判明した。したがってⅢ層上面は水田の機能面ではなく、畦畔状遺構も擬似畦畔（擬似畦畔B、斎野1987）と評価された（川添2022）。

②の観点では、調査区東壁における土層観察で畦畔とその間の耕作土層をみることができる（図3中）。注目されるのは図中の26～28層で構成される大畦畔で、削平された部分を加味しても上幅は約2m近くあることから道路と呼べる規模である。大畦畔から西へ約2.4mには小畦畔（22・25層）の高まりが見え、その両側に皿状の堆積層がありこれが水田耕作土に相当する。そして畦畔22層と耕作土23層の関係をみれば畦畔22・25層は2時期に分かれると理解される。この状況から、数度の畦畔再構築は

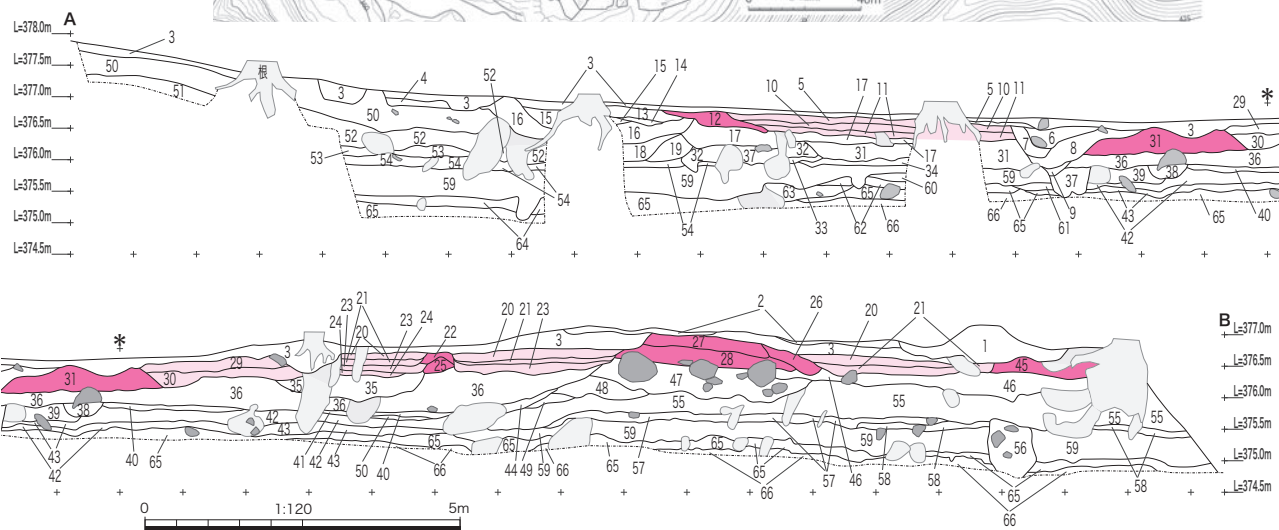
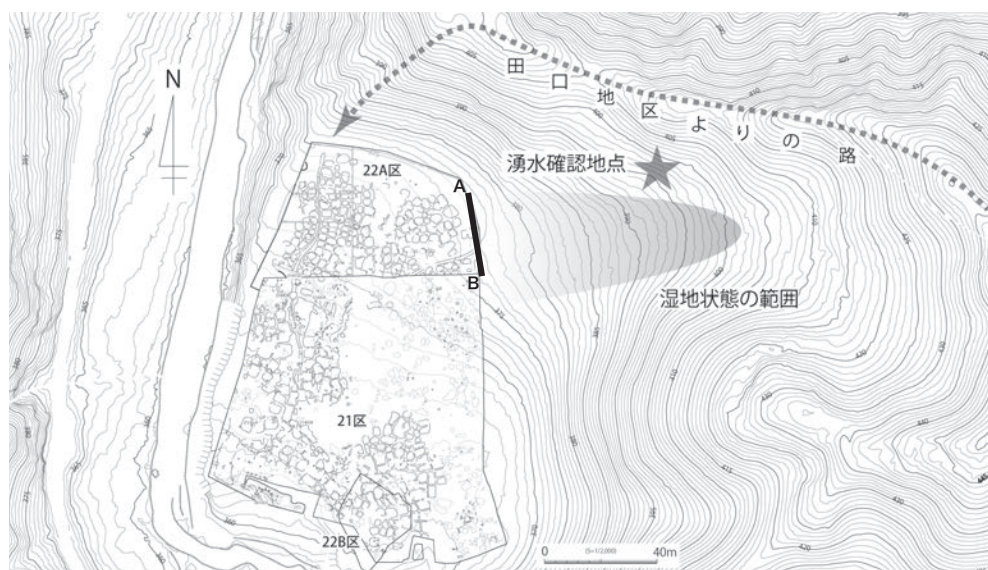
あっても大畦畔に大きな改変がなかったと考えられる。畦畔各層は表土層（1～3層）の削平を受け埋没していることから、廃絶とともに切り崩され埋められたとみられる。結果、地表面で道路・畦畔等の痕跡は一切みることができない。

同土層断面にみる水田形成以前の状況は、畦畔直下に47層など径70cmに及ぶ巨大な礫が混じる堆積層がある。これほどの巨礫が転石状態にあることから土石流の跡であろう。また同層の下位には48・49層がありこれらは一連の堆積だったと考えられる。これに対して31・36層など径10cm程度の角礫を含む層が水田耕作土の下に広がっている。特に36・40層は47～49層を切り込みそのまま大畦畔の立ち上がり連続している。このことから、巨礫を含む土石流の後にできた沢に36層などが堆積していき、その上部に35層など径2～3cmの円礫が堆積する小河川（溝）が流れる経過であったと推測される。そしてその縁辺を大畦畔（道路）として確定し、かつての沢を加工することから耕作地化が進められたものと考えられる。一方、その下層で縄文・弥生時代の遺構が検出されていることから、土石流堆積は弥生時代中期以降のことと考えられる。

4. 水田と用水路構造の概要

先述のように、大崎遺跡の水田遺構（遺構種別記号：SN）は21A区を始めとする全調査区で確認された。ただし21B区北半部は周辺と比べて希薄となっている。水田遺構1基の形状はさまざまで、隅丸方形、曲線混じりの台形など一定しない。同様に1基あたりの面積も差があり21B区南部（後述の1a群）を例にすると、最小クラス（5389SN）は約2.3㎡、最大クラス（5397SN）は約23.3㎡となる。中間的な規模は約6.1㎡（5326SN）～7.2㎡（5391SN）～11.6㎡（5410SN）であり、平均すると8～9㎡となる。

さて、検出された水田遺構はほとんど互いに重複せずに1つの水田景観を作り出していることから、それらが同時に存在したものと考えてよい。しかしそれは同時に開田したことを示しているわけではなく、あくまで水田耕作が廃絶



1. 7.5YR3/2 黒褐色シルト 径3~5cm程度円~角礫含む 盛土
2. 10YR3/3 暗褐色シルト 表土層
3. 10YR4/2 灰黄褐色シルト 表土層
4. 5YR3/3 暗褐色シルト
5. 10YR3/2 黒褐色シルト 一辺2~3cm程度角礫含む
6. 10YR3/1 黒褐色シルト しまり弱い 径20cm程度円礫含む
7. 10YR4/2 灰黄褐色シルト 一辺2cm程度角礫含む
8. 10YR3/2 黒褐色シルト 一辺3~5cm程度角礫含む 10YR3/3 暗褐色シルト混じる
9. 10YR2/3 黒褐色シルト
10. 10YR3/3 暗褐色シルト
11. 10YR3/1 黒褐色シルト
12. 10YR3/3 暗褐色シルト 径1cm程度礫含む
13. 7.5YR3/2 黒褐色シルト 一辺2~3cm程度角礫含む
14. 7.5YR2/3 極暗褐色シルト
15. 10YR3/3 暗褐色シルト しまり弱い
16. 10YR3/3 暗褐色シルト 一辺5~10cm程度角礫含む
17. 10YR3/2 暗褐色シルト 粘性ややあり 一辺2~3cm程度角礫含む 10YR4/2 灰黄褐色シルト混じる
18. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性ややあり 一辺5~10cm程度角礫含む
19. 10YR4/4 褐色シルト 炭化物微量含む 10YR4/2 灰黄褐色シルト混じる
20. 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性あり 炭化物微量含む 径1~2cm程度礫含む 田圃埋土
21. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性あり 径1~2cm程度礫含む 田圃埋土
22. 7.5YR3/1 黒褐色シルト 粘性あり 畦畔構築土
23. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性あり 径0.5~2cm程度礫含む 田圃埋土
24. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性あり 畦畔構築土
25. 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性あり 炭化物微量含む 畦畔構築土
26. 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性あり 畦畔構築土
27. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性ややあり 畦畔構築土
28. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性ややあり 15より暗い 径1~3cm程度礫含む 畦畔構築土
29. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性ややあり 径30cm程度円礫含む
30. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性ややあり 径2~3cm程度礫含む
31. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性あり 径2cm程度礫含む 一辺10cm程度角礫含む 2.5YR3/3 暗オリーブ褐色シルト混じる
32. 10YR3/4 暗褐色シルト 径1~3cm礫含む 10YR3/1 黒褐色シルト混じる
33. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性ややあり 10YR4/2 灰黄褐色シルト混じる
34. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性ややあり 10YR3/1 黒褐色シルト混じる
35. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性ややあり 径1~3cm程度礫含む 10YR3/1 黒褐色シルト混じる
36. 10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性あり 径3~10cm程度円~角礫含む 10YR4/4 褐色シルト混じる
37. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性あり 一辺2~3cm程度角礫含む 下に10YR2/2 黒褐色シルト混じる
38. 10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性ややあり
39. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性あり 10YR2/3 黒褐色シルト混じる
40. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性あり
41. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性あり 31より暗い 径1~2cm程度礫含む
42. 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性あり 炭化物微量含む 10YR2/2 黒褐色シルト混じる
43. 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性あり 10YR5/3 にぶい黄褐色シルトブロック微量含む 10YR2/2 黒褐色シルト混じる
44. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性あり
45. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性ややあり
46. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり 径1~3cm程度礫含む
47. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性あり 一辺10~70cm角礫多く含む 土石流による埋立て土か
48. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性ややあり 径1cm程度礫含む
49. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性ややあり 径1cm程度礫含む
50. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり 炭化物微量含む 一辺3~5cm程度角礫含む
51. 10YR3/3 暗褐色シルト 径1~3cm程度礫含む 下に7.5YR4/3 褐色シルト混じる
52. 7.5YR4/3 褐色シルト 粘性あり 炭化物微量含む 一辺3cm程度角礫含む
53. 10YR4/4 褐色シルト 粘性あり 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロック含む 10YR2/3 黒褐色シルト混じる
54. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり 下に10YR2/2 黒褐色シルト混じる
55. 10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性あり 炭化物微量含む 径2~5cm程度礫微量含む
56. 10YR2/2 暗褐色シルト 粘性あり 径20~50cm程度円~角礫含む
57. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性あり 10YR4/2 灰黄褐色シルト混じる
58. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性あり 10YR2/3 黒褐色シルト混じる
59. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性あり 炭化物微量含む 径0.5~1cm程度礫含む 10YR3/2 黒褐色シルト混じる
60. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり
61. 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性あり 下に10YR5/4 にぶい黄褐色シルト混じる
62. 2.5YR3/2 黒褐色シルト 粘性あり 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト混じる
63. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 粘性あり 10YR3/3 暗褐色シルト混じる
64. 2.5YR3/3 暗オリーブ褐色シルト 粘性あり 径0.5~2cm程度礫多く含む
65. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性あり 10YR3/1 黒褐色シルトブロック含む
66. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 粘性強い

図3 大崎遺跡 22A 区の調査区東壁土層断面（断面位置図は鈴木・川添ほか 2025 を改変、土層断面は新規作成）

した時点の状況であることに注意しておかねばならない。累代の耕作者たちによる長い営みの結果なのである。

そこで筆者は、調査報告書（鈴木ほか 2025）において水田遺構を以下の観点で7つの群に区分した。まず第1に、各水田遺構の畦畔にある切れ目を取・排水施設（水口）とみることで取・排水時における水流の経路を復元し、それらが連続するものどうしを1つの群と認定する。第2に、検出された2条の水路から取水可能な水田群を抽出する。これらの水路は、水田と重複していないので同時に機能していた可能性が高い。そして第3に、水路から取水不能な水田群は未知の水源を想定した（図4）。以下に各群の状況をみていこう。

1a群は、遺跡南東部（21B区南半部）にある南西方向に開けた凹地地形に位置する。標高は364.0～366.0mである。水口の位置からみた取・排水経路は北から南方向が大半である。したがってその水源は、1aの北東側斜面（グリッド1820）に位置する沢状地形に求めることができる。斜面からの湧水に依拠し、そこから木樋で水を引いていた可能性もあるだろう。

1b群は、遺跡北東部（22A区東半部）に位置する。標高371.0～375.0mである。この水田群も1a群に似た西側に開けた凹地地形に立地する。その南側で水路1219SDが検出されているが、水路と水田群の間には後世の集石遺構10010SSが位置する舌状に張り出した微高地があるため、当該水路からの給水は不可能である。よって、凹地最奥部の水源地（図3上）に最も近いとグリッド1221付近からの取水だった可能性がある。22A区東壁の土層断面を参照すると（図3中）、溝状の6～8層や15・16・18層があるがいずれも遺構面に対応する遺構はない。なお、先述のように土層断面で上下2時期の存在が確認された水田耕作土であるが、その付近で検出された水田遺構の中には、例えば1217SNと1215SNのようにわずかながら重複関係も認められる。1215SNはさらに水路1219SDの後になることから、水路廃絶以後も湧水を引き込むかたちで水田耕作が継続していたということになる。1219SDと東壁土層断面は同時に調査されていないが、標高からすると

東壁土層断面の35・36層が1219SDに相当する可能性が高い。すると同層は水田耕作土層（20・21・23層）より下位にあるため、壁面にみえる耕作土層は1215SNと同様に水路廃絶後の可能性がある。

2a群は、遺跡中西部の北から南へ下る標高366.0m～367.5mの緩斜面に立地する。南北方向の水路0145SD（1006SD）から東側に位置し、北から南へ取・排水がなされており一見0145SDを水源としているようでもある。しかし取・排水経路を遡上すると北東側に位置する水路0058SD付近に辿り着く。0058SDは遺跡北東部から下ってくる1219SDの延長で、比較的遠方の水源地から水を引いているのが特徴である。ただし0058SDに直接取りつく状況は確認されておらず、やや北西には斜面地に端を発する溝0067SDもあるので、もとはその辺りの湧水点を水源としていた可能性もある。

2b群は、0145SD西側の一群である。0145SDからの取水口や枝水路は見当たらない。これ以外に調査範囲内に水源地を特定できず、経路から調査区外の北西方向に水源地が想定される。したがってこちらも0145SDの構築以前に開かれた可能性が高い。2b群でも①と同じ時期の山茶碗が出土していることから、開田時期に大きな差はないと思われるが、①が凹地地形であるのに対してより開けた地形を利用している点で技術的な変化があった可能性もある。

3群は、遺跡南部（21A・B区）に位置する。河岸段丘の崖面に沿って形成される約20m×60mの範囲の細長い水田群である。一見すると個々の水田区画だけでなく群の範囲が比較的方形で整っているように見える点が特徴である。水口にみる給水経路は、南西方向へ下る地形に沿って北西から南西方向を基軸としている。3群南東端が1a群に食い込んだようになっているのもその経路に基づいているが、当該箇所は高低差がほとんどなく、逆に東から西方向への給水だったかもしれない。その場合、当該箇所は1a群に含まれると考えられえが、3群形成時に切り替えられた可能性もあろう。ともあれ3群の水源地はその北西隅に当たり、該地点には伊勢型鍋（図5-2006）の埋納された土坑5140SKが畦畔遺構上に位置する。このことか

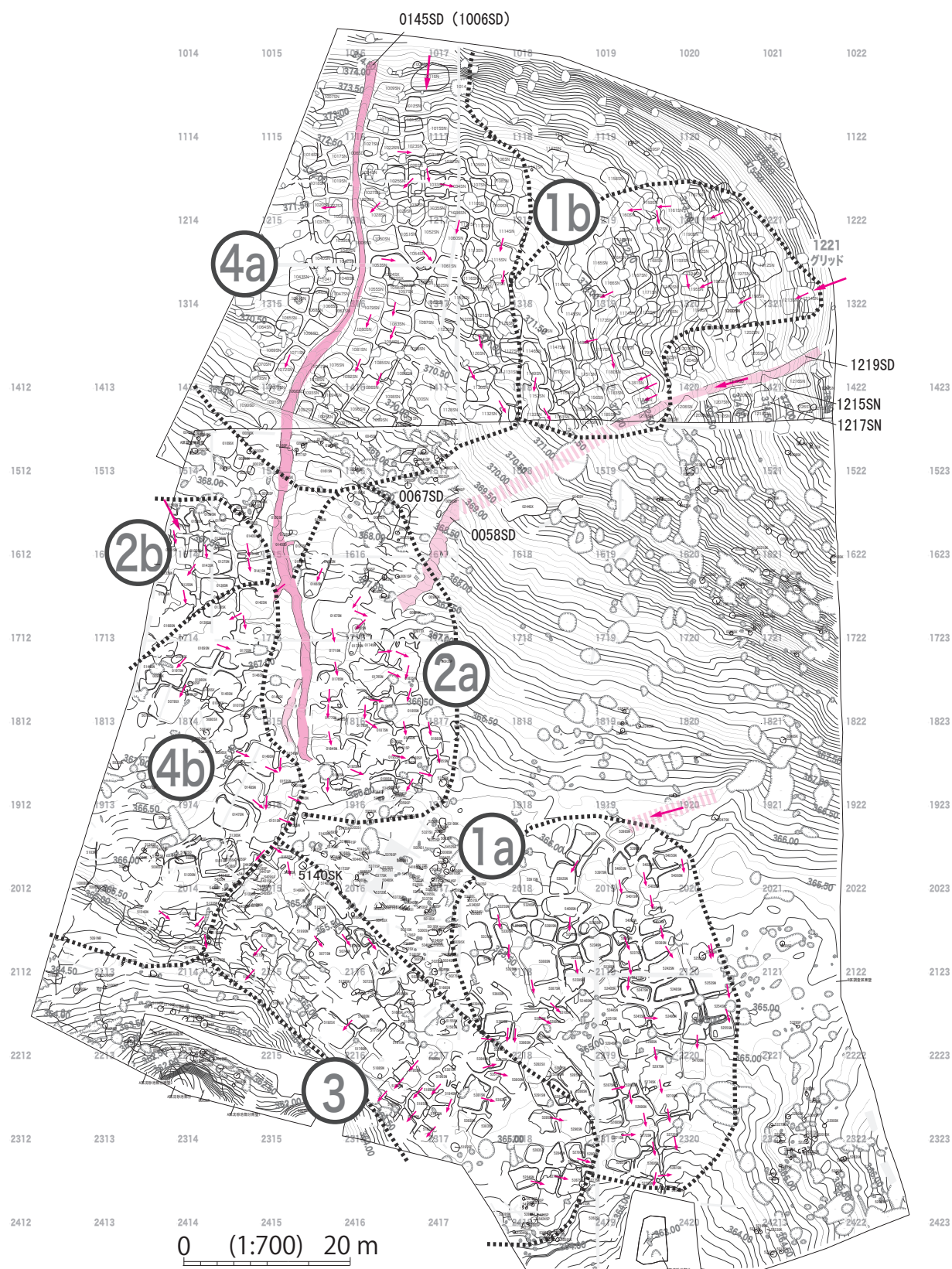


図4 大崎遺跡における水田遺構の分布とその水流方向による水田遺構群の区分（鈴木・川添ほか 2025 を改変）

ら 5140SK が水源祭祀に関わる可能性が考えられるが、水路が検出されていないので水源確保の具体的な手段については不明である。3 群の開田時期は伊勢型鍋が 13 世紀後半まで下る可能性が考えられるので、1a・1b・2 群に比べて明らかに一段階後に位置づけられる。

4 群は、遺跡北西部（4a 群、22A 区西半部）と遺跡南西部（4b 群、21A 区西部）の 2 か所に認められる。これらは水路 0145SD（1006SD）に沿って配置されており、特に後者では群の北端で枝水路も認められることから一連で構築されたものであろう。水路は北から南へ下る緩斜面の中央を流れており、その両側への給水が設計されたもので、先述した 2a 群の一部もこの水路開削に伴って作り替えられた可能性もあるだろう。その年代は、1006SD から土師器羽釜（図 5-2016）が出土しているので 14 世紀以降と考えられる。

このように水源・水路に注目して水田遺構群を区分すると、一見して基幹水路と思われる 0145SD（1006SD）であるが、そこから取水可能な水田の範囲は限定的であったことがみえてくる。その一方で、急斜面地やその隙間の凹地に由来する湧水を水源とする 1a・1b・2a・2b・3 群が、遺跡（調査区）内において分散しつつも比較的多くを占めており、見方によっては水路を通すことによってその間を埋めるようにして 4a・4b 群が成立したとも考えられる。こうし

て水源の違いが開田時期の差に関係していると思ふことができる。

5. 各水田遺構群の形成年代

では、水田遺構などの出土遺物の時期から各群の開田時期に違いは見出せるであろうか。報告書（鈴木・川添 2025）でも述べたように、水田遺構とその所在するグリッドごとに検出面（検 1・2）も含めた遺物の出土破片点数をカウントした。もちろん居住域となっている間はその場所が水田として利用されることはない。遺物の年代が示すのは土坑 5140SK 出土の伊勢型鍋を除くと、各出土地点の居住域利用の下限年代と水田化の上限年代ということになる。

まず平安時代の灰釉陶器は、遺跡の北西部（22 区西部）と南部（21A・B 区南端）に集中している。次に平安時代の煮炊具である土師器三河型甕 1 点と清郷型鍋 4 点の分布をみると、清郷型鍋は全て北西部に集中していることが注目される。清郷型鍋の時期は、灰釉陶器の後半段階から山茶碗の初期段階（10 世紀後半～11 世紀）に相当することから、遺跡北西部における活動時期もその頃と考えられる。これに対して遺跡南部は、灰釉陶器の時期が K-90 号窯式期～0-53 号窯式期であり北西部とさほど変わらないが、グリッド 2015 以外は破片点数 1～2 点で顕著な集中はみられない（表 1）。したがって平安時

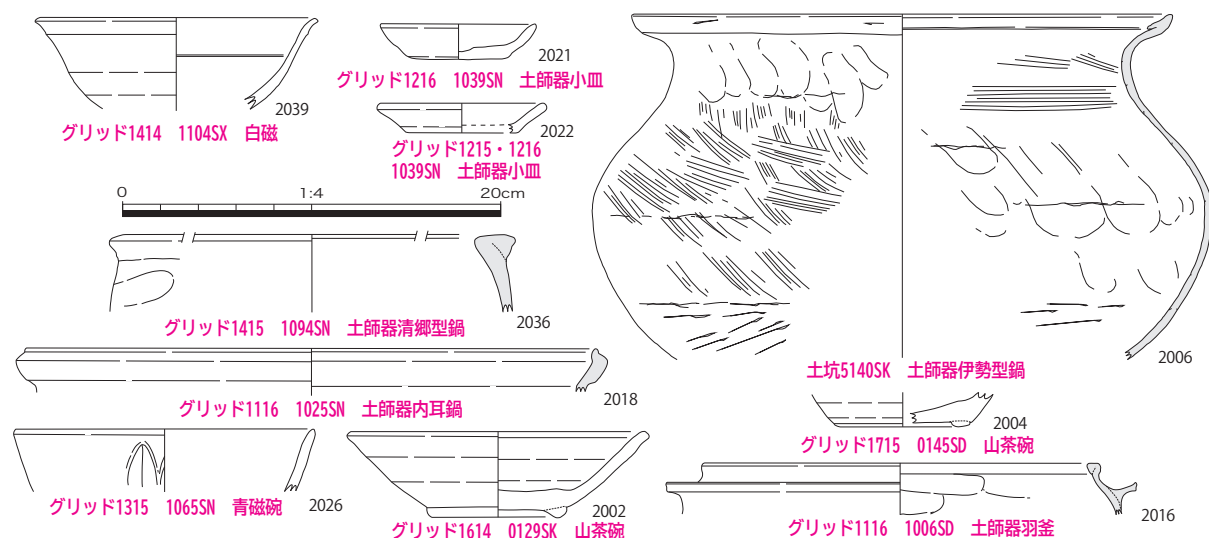


図 5 大崎遺跡における主な中世遺物（鈴木・川添 2025 ほかより転載、番号は同書掲載の番号）

代から鎌倉時代の活動域は主に北西部にあり、南部は一時的なものであったと推測される。

次に山茶碗であるが、遺跡北西部から南部まで分布域が連続する。1 グリッドあたりの破片点数5点以下が大半だが、グリッド2118のように9点に上る箇所もある。大半の山茶碗の時期は12世紀～13世紀前葉であることから、それに先行する灰釉陶器と清郷型鍋の時期に比べてより活動域が拡大したとみることができる。

これに対して、中世土師器の分布は山茶碗とやや異なり、遺跡北端部のグリッド1017で最多点数で(12点)、その近隣グリッドも点数が多い。ところがその分布域は22A区と21A区の境で一旦途切れ、再び遺跡南西部に集中域がみられる。また、グリッド1915から東側の山茶碗集中域で中世土師器はほとんどみられない。中世土師器には、時期特定の難しい土師器小皿の他に山茶碗より時期の下る14世紀代の羽釜や15～16世紀くの字形口縁の内耳鍋も含まれる。よってその分布が示す年代幅は山茶碗より新しい時期も含めて捉えることになる。結果、山茶碗と中世土師器の分布域は重なるところがある一方で、特に破片点数の多い地点に着目するとその違いが顕著となる。それが、概ね12～13世紀代と14～16世紀代の集落居住域の違いを示していると考えられる。

以上山茶碗と中世土師器の出土分布を統合すると、遺跡北西部では14～16世紀代も居住域になっていたと考えられる。さらに同地点では、平安時代後期～鎌倉時代の白磁や青磁の碗・合子といった特殊品の集中にも注意しておきたい。このことから、遺跡北西部が平安時代から戦国時代まで続いた集落の中心地だったと評価できる。こうして集落の居住域利用が終わったところから水田化が進んだと理解して、以下のような開田時期が想定されよう。

まず1b群はほぼ古代・中世の遺物分布と重ならない。よって最も開田時期が遡る可能性がある。次に1a群では、尾張型第5～6型式の山茶碗が集中するグリッド2118を含んでおり、13世紀代中葉以降となろう。同じく2a・2b群も山茶碗が中心で、13世紀中葉が開田の上限年代となる。こうして1a・1b・2a・2b群では、鎌倉時代半ばの13世紀中葉には水田景観が形

成されていたとみることができる。これに対して3群は、先述のように土坑5140SKの伊勢型鍋が上限年代となり、若干後の13世紀後半と考えられる。以上の各群は、2a群を除くと斜面地の湧水を水源としており、長大な灌漑水路の掘削を伴わない段階だったと評価される。

そして灌漑水路1006SD・0145SDが開削され、それまで集落の中心地だった遺跡北西部でも水田開発が開始された。4a・4b群は、いずれも14～16世紀の中世土師器を含む遺物の分布域と重複するが、両群の構築が同時とすれば居住域の下限年代である16世紀代まで下る可能性がある。以上をまとめると、13世紀中葉～後葉の段階と14世紀～16世紀代の段階の間には、開発空白期とともに灌漑技術の進展があったことも指摘できる。また4a・4b群の開田は、大崎遺跡における居住域としての土地利用が終わったという点でも遺跡変遷の画期となる。

6. 大崎遺跡周辺の中世遺跡

次に大崎遺跡周辺における平安時代から鎌倉時代の状況を、境川流域と豊川(寒狭川)流域にみていく。

大栗遺跡 大栗遺跡は、大崎遺跡から境川を挟んで約550m北に位置する(図1)。弥生土器(壺)が若干数出土している以外はほとんどが江戸時代末以降の陶磁器類である。後者は遺跡地に発掘調査直前まで存在した民家に関わるものであろう。平安時代の遺物は表土から出土したK-90号窯式期の灰釉陶器碗が1点のみで、当該期の小規模集落が存在した可能性がある。そして遺跡の基本土層中において水田遺構が指摘されている(図7、樋上編2022)。いわゆる小規模区画の斜面地水田であり、大崎遺跡に似た状況である。耕作土と畦畔の大半は上層の耕作土や礫混じりの整地土に埋もれているが、一部の大畦畔はその段階にも機能しているようである。しかも大畦畔は調査直前まで存在した民家敷地の石垣と同位置にあることから、地境でもあった。先述した遺物の時期相によれば、江戸時代末期に屋敷地となったことによって土地利用が大きく変わったと推測されるが、それと水田廃絶時期との関連は明らかでない。

表1 大崎遺跡における中世遺物のグリッド別分布状況

調査区	グリッド	古代灰釉	古代土器	中世山茶碗	中世土器	青磁白磁	古瀬戸	常滑	戦国土器	その他	近世
22A	1015								1		
22A	1016	3					1			2	
22A	1017			1	12			1	2		
22A	1115		1		3		1			2	
22A	1116	4		2	6	1	2	1	3	1	
22A	1117				1						
22A	1117						1		1		
22A	1118	1								1	
22A	1119				1						
22A	1215	5	1	2	6	2	3	2	1		
22A	1216	1	1	3	1		1				
22A	1217				1	1				1	
22A	1221							1			
22A	1314	5		1	3						
22A	1316	1			2	5				2	
22A	1319	2					6			1	
22A	1321			3	1		1	1			
22A	1414	5			1	1					
22A	1415	3	1	3	2	1	2		1	2	
22A	1416			2	1		2				
22A	1417						1				
21B	1418						1				
22A	1419							1			
22A	1421	1									
21A	1513			1							
21A	1514			4		2					
21A	1515	1		3		2		2			
21A	1516					1					
21B	1518	1									
21B	1520				1						
21A	1613	1		2	1		1				
21A	1614			3	1						
21A	1615	1		2						2	
21A	1713				3		1				
21A	1714				4			1		1	
21A	1813			2		2				1	
21A	1814			3	2						
21A	1815		1	3	1						
21B	1818						1				
21A	1913				1						
21A	1914	1		5	6				1		
21A	1915	1		2	4					1	
21A	1916			3							1
21A	1917			1							
21B	1919							1			1
21A	2012							1			
21A	2013			2	6						1
21A	2014			1	4	1	1				
21A	2015	4			1						
21B	2017	1									
21B	2018	2		3		1					
21B	2019			1							
21A	2113				1						
21A	2115	2			2	1					
21A	2116	1		3							
21B	2117			3							
21B	2118	1		9							
21B	2119			1	1		2				
21B	2120	1									
21A	2214			1	1						
21A	2215	1			1		2				
21A	2216			2	1						
22B	2217	1			1		1				
22A	2218	3							1		
21B	2219	1		1	1						
22B	2317			2					1		
22B	2417			1	1					1	
21B	2418				1						
22A	-	2		5	8	2	2	2		1	
22A	1215・1216			2	1						
21A	1414・1514	1									
21A	1513・1514			1							
21A	1614・1615			1							
21A	1916・1917			1	1						
21A	1917・2017				1						
21B	2017・2018・2117・2118			2							
21B	2018・2019			2							
21B	2118・2018	1		2	1						
21B	2217・2218	1		1							
21A	2316・2317				1						
22A	2417・2317			1							

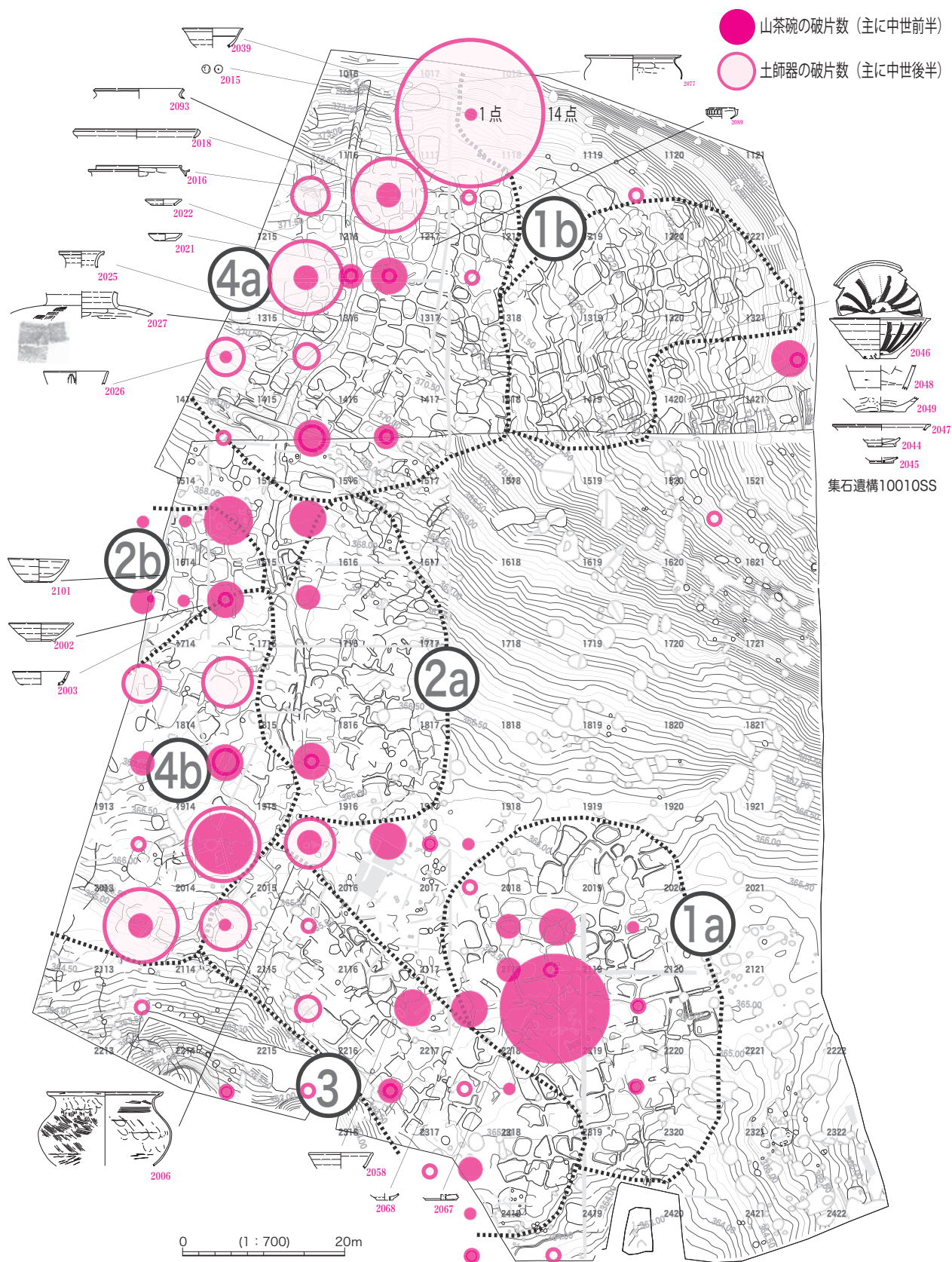


図6 大崎遺跡における中世前半と同後半の遺物出土点数（鈴木・川添ほか 2025 を改変）

万瀬遺跡 川向地区の境川右岸に位置する。陶器類では10～11世紀のものはほとんどみられず、山茶碗は尾張型第4型式以降である。これは土師器清郷型鍋がないことも矛盾せず、縄文時代の集落廃絶後は12世紀になって土地利用が始まったとみることができる。山茶碗のピークは尾張型第6・7型式であり、その後13世紀後葉～14世紀は縮小する。一方、古瀬戸および瀬戸・美濃窯産陶器は古瀬戸後期様式～大窯第1段階、同第4段階があり、15世紀後葉～17世紀初頭に相当する。以上の遺物出土分布は縄文時代の活動域にほぼ重複しているが、江戸時代前期（16世紀末～17世紀後葉）の遺物は調査区ほぼ全域に分布しており、土地利用の変化がうかがえる（河嶋編 2024）。

上ヲロウ・下ヲロウ遺跡 範囲確認調査において、尾張型第4～7型式の山茶碗類が出土しており、古瀬戸および瀬戸・美濃窯産の出土傾向も万瀬遺跡に類似する。これに加えてK-90～0-53号窯式期の灰釉陶器碗や土師器清郷型鍋が出土しているので、先行して平安時代の集落が存在した可能性が高く、集落消長も他と比較して長いと推測される（川添 2023）。

滝瀬遺跡 平成30年度の発掘調査では、河川から高低差のある斜面地において壁面に造付けられたカマドを伴う竪穴建物跡が確認された。竪穴建物跡からは灰釉陶器や土師器甕が出土しているので、9世紀後半を中心に集落が存在したと考えられる。また竪穴建物跡以外にも周辺で土坑が検出されており、灰釉陶器の碗や

段皿が出土している（川添・早野 2019）。

大畑遺跡など 大畑遺跡は境川に面していない立地であるが、中央部は窪地で湧水点も存在する。その窪地周辺でK-90号窯式期の灰釉陶器が出土している（鈴木・永井 2018）。平安時代に一時的な土地利用があったものと考えられる。石原遺跡では、著しい土石流堆積のため、縄文時代中期以降の集落の状況は不明瞭である。1点のみ灰釉陶器（E-1290）が出土している（田中編 2023）。一方、境川左岸の渡河点にある笹平遺跡は6,930㎡を発掘調査されたが、古代・中世の遺物は灰釉陶器2点のみで、それ以外は江戸時代後期以降である（鈴木編 2022）。

胡桃窪遺跡 以下は豊川流域である。竪穴建物跡1基があるが、カマドはなく土師器甕の出土もなかった。その一方で床面に炉跡や金床（台座）がみられることから、山林資源獲得に伴う工具の修繕などを行う鍛冶施設と推測されている。出土遺物として、0-53号窯式期の灰釉陶器碗・皿と瓶類があるので10世紀前葉と考えられ、釘など鍛冶の原料となる金属片もみられる（鈴木編 2023）。

西地・東地遺跡 古代以降の遺構・遺物（総破片点数2,894点）は遺跡西端に集中しており、豊川と高低差のある平場（標高457m前後、14B区・16区）で平安時代以降の活動が続いていたようである。ただし平安時代の状況は、灰釉陶器14点と土師器清郷型鍋2点とわずかである。これに対して13世紀以降の瀬戸・美濃窯

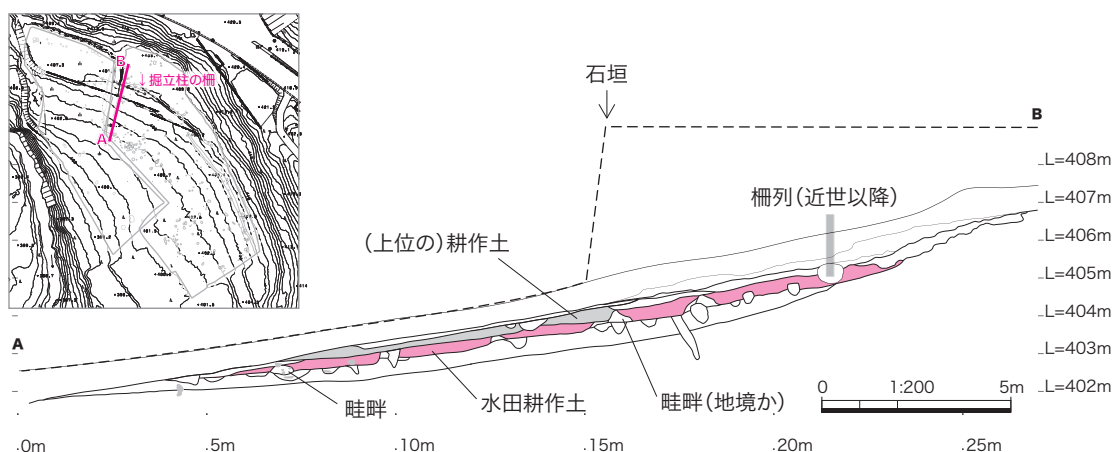


図7 大栗遺跡の基本土層断面にみる中世水田の遺構（樋上編 2022 を改変）

産陶器や土師器鍋類の数量が圧倒的で、炉跡 5 基、竪穴状遺構 2 基以上がいずれも戦国時代から江戸時代前期にかけてのものである（川添編 2019）。このことから中世には地域の中心的存在だったと考えられる。

大名倉遺跡 西地・東地遺跡の対岸に位置する。縄文時代早期～晩期には遺跡北部で活動域を変えながら土地利用がなされており、それに対して遺跡南部で戦国時代～江戸時代の陶器が出土する傾向にある（永井・川添 2018）。西地・東地遺跡と対照的に河岸段丘が発達し平坦面が広がるにもかかわらず、中世前半段階の遺物が少ない点が注目される。

このように各遺跡における活動の規模は縄文時代のそれより小さいが、発掘調査によってこれまで漠然と把握されていた三河山間部地域における平安時代以降の活動の消長について、より精度が高まった（図 8）。当地域では、① 9 世紀後半～10 世紀前半の灰釉陶器、② 12 世紀中葉～13 世紀中葉の山茶碗、③に 15 世紀以降の瀬戸・美濃窯産陶器のそれぞれが顕著に出土するが、①の遺跡は大半が 10 世紀後半以降に続かず、その上で②・③共に確かめられるのは①の 30～40% 程度にすぎないことがわかる。一方、万瀬遺跡のように②に起点がある場合でも③つながる事例があることから、②における開発がその後の地域社会形成にとってきわめて重要であったと考えられる。逆に①における開発は、大半が②・③とは異なる目的や主体によって進められた可能性が高く、他の史料によってその差異を見出していくことも必要となる。

7. 設楽町域における中世の動向

とはいえ、境川と豊川沿いの中世の動向を伝える史料はひじょうに少ない。ここでは和鏡と棟札に着目して、水田開発を進めた主体の背景となる地域的つながりを推察してみよう。

設楽町内で出土した和鏡は 2 点が知られる。1 点は東納庫スミ川口の畑で出土した松喰鶴鏡である。出土地は、豊川沿いの県道から分岐する町道でさらに山間部へ上った集落地で大名倉地区と名倉地区の境（宇連地区）に位置する。その最高地点に白山神社が所在し、その関連も想定されている（平松 2015）。同社は大永年間（1521～1527）創建という（設楽町史編さん委員会 2001）。和鏡の時期は 13 世紀代であろう。

もう 1 点も大名倉地区で出土したもので、水辺蘆双雀鏡に分類される。出土地は豊川の川岸にある白鳥神社旧地で、焼き歪んだ状態である。同社は天明 3（1783）年に火災に遭い、その後明治元（1868）年に旧阿弥陀堂に移されている（現在は設楽ダム建設に伴い対岸へ移転）。白鳥神社の由来は、建久元（1190）年に旧作手村白鳥から分祀されたのが始まりである。江戸時代には朱印五石が下付される社格で、北設楽郡内ではここと津具八幡社のみであった。

設楽町内の 2 面の和鏡は、いずれも伝世品に近い状態であるため中世段階にどのように保持されていたのかは不明である。しかし白鳥神社の創建と和鏡の時期に近い点は、その関係の深さを示していると考えられる。また、白山神社

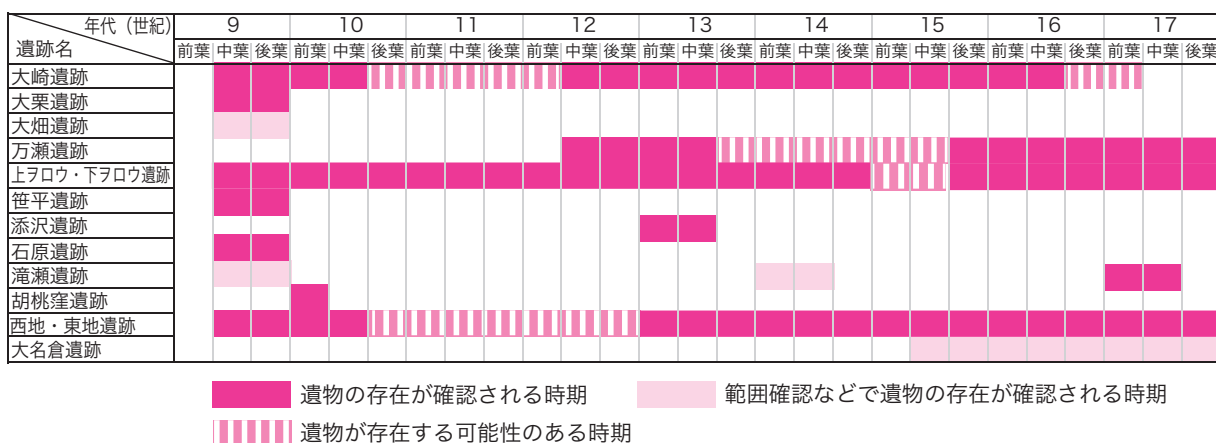


図 8 設楽町内の境川・豊川流域における主な中世・近世遺跡の消長

と白鳥神社がともに大名倉地区で近い位置関係にある点も興味深い。

神社（建造物）の存在を示す棟札は、小松地区（江戸時代は小松野村）の天道神社のものが北設楽郡内最古である。「正和五丙辰年」「奉建立天道大明神」とあり（設楽町誌編さん委員会 2004）、1316 年の創建時であろう。次いで宝徳 3（1451）年再建時の棟札に「願主怒田輪村」に加えて「永江沢」「向林」の地名が記されていることから、15 世紀代には怒田輪村を中心に複数村によって支えられていたことがわかる（設楽町誌編さん委員会 2001）。これらの村域は伊那街道に沿って田口から八橋地区へ伸びており、交通路によって村どうしがつながっていたことがわかる。これに対して川向地区にある永禄 13（1570）年の東堂神社棟札は「加茂郡足助庄名蔵郷河向村」なので、美濃街道（現国道 257 号）によって境川右岸が名倉地区と一体になっていたと考えられる（図 9）。

以上の和鏡や棟札の存在から 12 世紀末～16 世紀代に形成された地域的つながりは、現在の地区に対応させると以下のようなになる。およそ基点となるのは国道 257 号の境川渡河点（設楽大橋）で、①川向地区（境川右岸）～名倉地区、②小松地区（境川左岸）～八橋地区、③大名倉地区（豊川流域）となる。もちろんこの地域区分は 1 つの基準に拠ったものではないし、時間的な併行関係も不明である。しかし重要な点は、江戸時代の数か村に相当する共同体によって、地域の信仰や神社の経営が支えられていたことである。このことは先に挙げた大崎遺跡周辺の中世遺跡を評価するに際して、複数遺跡における集落や耕作地の動態が連動していることを示唆している。すると、遺跡消長の画期②として挙げた 12 世紀中葉～13 世紀中葉において、空白とな

っている例えば大畑遺跡や大栗遺跡が耕作地として開発されていた可能性も想定しておくべきだろう。それぞれの遺跡では中世の斜面地水田と山上からの湧水・沢水が確認されている。むしろ大崎遺跡は、水田開発と併行して居住区域が存在したがゆえに水田関連遺構が認識された稀有な事例であり、居住区域は耕作地の経営主体だった可能性が高い。

一方、これらの小地域を包括する荘園支配としてのまとまりも注意しておきたい。先にあげた東堂神社の「足助庄」は三河国賀茂（加茂）郡東部地域に広がっていたとみられ、その名から足助街道（飯田街道、現在の国道 153 号）が中心であった。よって川向地区はその最縁辺に位置する。これに対して南方の南設楽郡域（現在の新城市富永）から広がる富永荘は、竹島白鳥大明神（設楽町田峯の白鳥神社）の応永 17（1485）年棟札に「富永庄」とあるので（鈴木 1968）、15 世紀には段嶺地区～田口地区が同荘域に含まれていたと考えられる。すると中世後半段階には、境川・豊川を挟んで南北に区分す

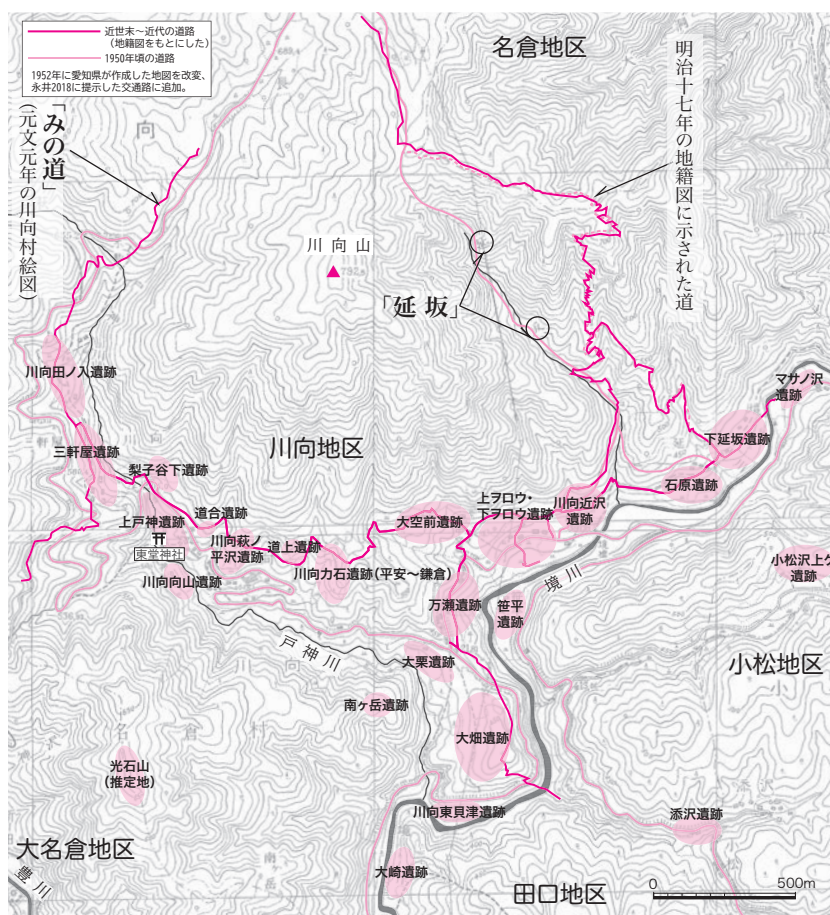


図 9 設楽町川向地区と名倉地区を結ぶ近代以前の交通路と遺跡分布

る2つの領域を想定することになる。この時期は大崎遺跡における水田開発の変遷において、用水路を整備しそれまで湧水・沢からの引水で営まれていた水田群の隙間を埋めるような水田の展開がより完成された段階（4a・b群）に相当する。同時に居住域も完全撤退した。これを契機に、大崎遺跡の水田は富永荘に取り込まれた可能性もあろう（図10）。

以上、大崎遺跡の中世水田をめぐって憶測を述べた。逆に江戸時代に水田が廃絶する過程は触れなかった。中世の斜面地水田が近世以降の棚田に繋がらない可能性が高く、背景に井堰による給水の発達が考えられる。江戸時代の村の成立と合わせて再考することとしたい。



図10 奥三河における足助庄と富永荘の境域（鈴木1968を改変）

【参考文献】

- 河嶋優輝編 2024 『万瀬遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第222集
- 川添和暁 2019 『西地・東地遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第21集
- 川添和暁 2022 「大崎遺跡」『年報』令和3年度 愛知県埋蔵文化財センター
- 川添和暁 2023 「上ヲロウ・下ヲロウ遺跡」『年報』令和4年度 愛知県埋蔵文化財センター
- 川添和暁・鈴木正貴編 2019 『西地・東地遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第211集
- 川添和暁・早野浩二 2019 「滝瀬遺跡」『年報』平成30年度 愛知県埋蔵文化財センター
- 北村和宏 1996 「尾張の『伊勢型鍋』」『第4回東海考古

学フォーラム 鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会

- 設楽町誌編さん委員会編 1998 『設楽町誌 近世文書編Ⅰ』北設楽郡設楽町
- 設楽町誌編さん委員会編 1999 『設楽町誌 近世文書編Ⅱ』北設楽郡設楽町
- 設楽町誌編さん委員会編 1999 『別冊 設楽町誌 近世文書編Ⅱ』北設楽郡設楽町
- 設楽町誌編さん委員会編 2001 『設楽町誌 村落誌』北設楽郡設楽町
- 設楽町誌編さん委員会編 2004 『設楽町誌 教育・文化編』北設楽郡設楽町
- 社本有弥 2023 「大崎遺跡」『年報』令和4年度 愛知県埋蔵文化財センター
- 鈴木恵介・永井邦仁 2018 「大畑遺跡」『年報』平成29年度 愛知県埋蔵文化財センター
- 鈴木恵介編 2023 『胡桃窪遺跡 大名倉丸山遺跡 添沢遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第221集
- 鈴木富美夫ほか 1968 『北設楽郡史 原始～中世』北設楽郡史編纂委員会
- 鈴木正貴編 2015 『笹平遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第215集
- 鈴木正貴・川添和暁編 2025 『大崎遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第228集
- 斎野裕彦 1987 「弥生時代・古墳時代の水田跡」『富沢仙台市都市計画道路長町・折立線建設に伴う富沢遺跡第15次発掘調査報告書』仙台市教育委員会
- 永井邦仁 2005 「古代の足助」『研究紀要』第4号 愛知県埋蔵文化財センター
- 永井邦仁 2013 「西三河 - 平野と山間部の開発 -」『考古学研究会東海例会発表資料』名古屋大学考古学研究室
- 永井邦仁 2017b 「古代～中世の山間部開発」『新編豊田市史 資料編考古Ⅲ古代～近世』豊田市
- 永井邦仁 2018 「延坂の古道」『設楽発掘通信』No.43 平成30年12月号 愛知県埋蔵文化財センター
- 永井邦仁 2021 「ヲロウの古道と境川の渡河点」『設楽発掘通信』No.60 令和3年1月号 愛知県埋蔵文化財センター
- 永井邦仁・川添和暁 2018 「大名倉遺跡の研究」『研究紀要』第19号 愛知県埋蔵文化財センター
- 樋上昇編 2022 『大栗遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第218集
- 平松博久 2015 「郷土館発 鏡」『文化したら』第29号 設楽町教育委員会